

一、次の——のカタカナを漢字に直しなさい。⑤⑥は送りなをふくめて書きなさい。

- ① ショウシンの彼女をなぐさめる。
- ② ジョウハツした分の水を足す。
- ③ リンキオウヘンに行動する。
- ④ 知恵をハイシヤクする。
- ⑤ 使用料を現金でオサメル。
- ⑥ 文化祭の劇の主役がツトマル。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

突然ですが、あなたはゲームが好きですか。私は子どもの頃、よく友達とゲームで遊んでいました。コントローラーをバッグに入れて友達の家を集まり、みんなで大騒ぎしながらプレイしたものです。

最近では、協力して敵を倒すタイプのゲームが流行っています。そうしたゲームで一番盛り上がるのは、何と言っても、友達と一緒に強敵を倒したときでしょう。「ぐおおおおおお」と言いながら消滅する魔王を眺め、友達とともに雄叫びを上げる。そのときの爽快感はたまりません。

そういうとき、魔王にはやはり*悶絶してほしいものです。これまで散々こちらを苦しめていた魔王が、一言も発さず、安らかに【①】を引き取ってしまったら、②はつきり言っ物足りません。せめて悲鳴くらいは聞かせてほしいですね。

(中略)

たとえば、倒された魔王が「ぐおおおおおお」と悶絶していると、その魔王は苦しんでいます。もしも、安らかに【①】を引き取るだけでは物足りない、と思うなら、そのとき私たちは、魔王が苦しんでくれないと満足できない、苦しんでいてほしい、と思っっていることになります。要するに魔王が苦しむことを望んでいるのです。

もちろん、その欲求がゲームのなかだけに留まっているのなら、なにも問題はありません。しかし、それがエスカレートし、現実の世界でも同じような欲求を抱いてしまったら、これは大問題です。他者が苦しむことに快感を得てしまうのだから、そうした人は、暴力を振るったり、いじめを働いたりするかもしれません。

私は、暴力的なゲームが必ず人間を暴力的にする、と言いたいわけではありません。そうではなく、現実の世界ではとても許されないような暴力への欲求が——すなわち他者の苦しみへの欲求が、ゲームの世界には存在する、ということ、ここで考えてみたいのです。

もっとも、すべての人にそうした欲求があるとは思えません。世の中には、魔王の「ぐおおおおおお」にすら耐えられない人もいますでしょう。ただ、これだけ暴力的なゲームが世の中に流通していることを考えれば、かなり多くの人の心のなかに他者の苦痛への欲求があると考えると、不思議ではないのではないでしょうか。

魔王の「ぐおおおおおお」への欲求は、*エゴイズムではうまく説明できません。なぜなら、魔王が悶絶すること自体は「私」に対して何も利益をもたらさないからです。そのゲームのなかでは、魔王が悶絶して死んでも、安らかに死んでも、結果は同じです。悶絶を求める人は、自分の利益を求めているのではなく、あくまでも他者の苦しみを求めているのです。

ではこの欲求をどのように説明したらよいのでしょうか。こうした問題を考えるのに有効な手がかりを示しているのが、近代ドイツの

哲学者、ショーペンハウアーです。彼は、私たちが魔王に対して抱くような衝動を「悪意」と呼び、エゴイズムから区別したのです。

ショーペンハウアーの定義によれば、エゴイズムが自己の快楽を求めることであるのに対して、悪意は他者の苦痛を求めることです。何の利益にもならないにもかかわらず、人間が他者を苦しめたいと思うのは、悪意の衝動に駆られているからです。そしてそれはエゴイズムとは本来関係のない*概念である、と彼は考えます。

*ホップズと同様に、ショーペンハウアーもまた、あらゆる生物がエゴイズムを持つと考えました。エゴイズムは、私たちが生きるためには仕方のないものです。ところが悪意は、少なくとも生きる上ではまったく必要のないものです。エゴイズムなしに生きることとは不可能ですが、悪意なしに生きすることは可能です。したがって、エゴイズムは動物的ですが、悪意は悪魔的である、と彼は表現します。その意味において、③悪意はエゴイズムよりもより悪いことなのです。

(中略)

悪意は他者の苦痛を求めることである——それがショーペンハウアーの考えです。ただし彼は、そこにはさまざまな段階が、つまり*グラデーションがあると述べています。

まず、もっともレベルが低いのは、ただ頭の中で想像されるだけの悪意です。「あー、ぎゃふんと言わせてやりたいな」と思う気持ちです。その程度であれば、私もよく思ってしまします。たとえば学会で議論をしていて、すぐく意地悪な質問をされたときです。すると、ただ普通に答えるだけではなく、相手が意地悪な質問をしたことを後悔させるくらいに、意地悪な反論を返したくなるのです。もちろん、そんなことをしてもトラブルになるだけですし、文字通り、自分には何の利益もありませんので、実行には移しません。

ショーペンハウアーは、通常、そうした悪意は理性によって押し留められ、表には出てこないと考えました。【④】、日常のいたるところに潜んでいる、制御の難しい悪意もあります。それが、嫉妬です。

嫉妬は、自分がないもの、自分より優れたものを持っている人を、羨む気持ちです。【⑤】、ただ羨ましいと思っただけなら、それは何も問題ではありません。嫉妬する人は、羨ましいと思っ人と自分を比較し、自分が何かに欠けていたり、相手よりも劣っていたりすることは、【⑥】であると考えます。だから、相手が自分よりも優れていることが許せず、相手をちよつとでも引きずり下ろしたい、ちよつとでも嫌な思いをさせたい、と思っのです。

たとえば、「私」が人から好かれれない性格だとしましょう。それに対して、目の前に、いつも周りから人気のある人がいるとします。このとき「私」は、その人気者が、自分に欠けているものを不当に*占有しているように感じます。「ちよつとはその人気を私にも分けてくれよ」と思っわけです。そのように嫉妬に駆られた「私」は、

⑦相手の人氣が失われるようなことを、わざとすることもありません。たとえば、その人の嘘の噂を流したり、その人をあえてみんなの前で怒らせようとしたりする、ということ、

こうした行為は、その人から人氣を奪うことを目的にしているのであり、ショーペンハウアー風に言えば、他者の苦痛を求める悪意に駆られたものです。しかし、そんなことをしてもまったく意味がありません。もしも本当に「私」が自分の人氣のなさを嘆いているのなら、もつと違つた面で努力し、自己*研鑽するべきなのです。結局、⑧悪意に駆られる人は、それによって自分をもつと貶めることになり、嫉妬が人間にとって有害なのは、自分にとって価値があるものを憎む、という矛盾に陥ってしまうからです。先ほどの例で言えば、「私」

は、本来なら人から人気があることを良いことだと思っているのに、人気者を憎んでいるわけです。しかし、本当に人気があることに価値を認めているなら、人気者を称賛することができなければなりません。それが⑨首尾一貫した態度です。それができずに嫉妬していると、いつしか自分が何に価値を感じているのか、何を望む人間なのかがわからなくなってしまうかもしれません。

(戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』による)

注 *悶絶——もだえ苦しみ気絶すること。

*エゴイズム——皆の利害は考えず、自分の欲望を満たすことを最優先にする考え方。

*概念——何かについて、頭の中で作り上げている意味内容のこと。

*ホップズ——イギリスの哲学者。人間の本质はエゴイズムにあると説いた。

*グラデーション——明暗や色調などを段階的に変化させること。

*占有——あるものを自分だけのものとして持つこと。

*研鑽——何かを高めようと努力すること。

問1 空らん【①】に共通して入る漢字一字を答えなさい。

問2 ——②「はつきり言って物足りません」とあるが、筆者によれば、このように感じるのはなぜか。「から」に続くように十字以内で答えなさい。

問3 ——a eの中で意味が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問4 ——③「悪意はエゴイズムよりもより悪いことなのです」とあるが、筆者がこのようにいうのはなぜか。それについて説明した次の文の空らんをうめなさい。ただし【A】は本文中から十五字以内でぬき出し、【B】は二十字以内でまとめなさい。

エゴイズムは【A】だが、悪意は【B】から。

問5 空らん【④】・【⑤】に入る語の組み合わせとして最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、④つまり ⑤むしろ

イ、④ところが ⑤もつとも

ウ、④なお ⑤だから

エ、④もしくは ⑤すなわち

オ、④それゆえ ⑤もちろん

問6 空らん【⑥】に入る語として最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、不義理 イ、不自然 ウ、不必要 エ、不完全 オ、不公正

問7 ——⑦「相手の人気が失われるようなことを、わざとするかもしれない」とあるが、その理由として最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、自分が人から好かれないのは、人気者が周りからの人気を独り占めできると思い込んでいるせいであり、それをやめさせようと思うから。

イ、自分に欠けている人気を他の人気者が自分だけのものにしていくのはおかしいと感じ、その人の人気を自分のものにしようと思うから。

ウ、嘘の噂を流すことによって人気者の信用や人となりを不当におとしめれば、皆は次の人気者をさがし始め、最終的に自分を見いだしてくれると思うから。

エ、人気を分けてほしいと思っている自分に人気がまわってこないのは、周りが別の人を人気者だと勘違いしているためだと思うから。

オ、人気者が怒ればその人気の独占にもかげりが見え始め、人々は他の人気者を求めるようになり、最後は自分の価値に気付いてもらえると思うから。

問8 ——⑧「悪意に駆られる人は、それによって自分をもっと貶めることになります」とあるが、「自分をもっと貶めること」によってどのような結果になるのか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問9 ——⑨「首尾一貫した態度」とあるが、どのような点が「首尾一貫し」ているのか。最適なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア、人気者は価値ある存在であることを認め、その価値をそのまま自分自身にもあてはめている点。

イ、たとえどんな性格の人であっても、人々の間で人気者になっていればすばらしいと認めている点。

ウ、人気者を称賛することで、集団が誰か一人に人気を集中させることの価値を再確認している点。

エ、人気者に対してであつても、皆から人気があることの価値について素直に肯定し評価している点。

オ、一度人気者になれたのだから、この先もずっと一貫して人気を持ち続けると考えている点。

問10 筆者が本文中で述べている「嫉妬」について、これと「憧れ」の違いを、「自分」と「相手」という言葉を必ず用いて五十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学三年の「わたし」・美琴は、祖母・節子と母・響子の三人で暮らしていたが、響子の急な提案により、響子の同級生の朱美、その娘の優菜、優菜の娘の野々花と同居することとなった。中学の同級生である野々花とわたしは親しいわけではなかったが、同居する中で少しずつ距離を縮めていった。そんなある日、野々花の母・優菜が失踪する。優菜は数ヶ月後に帰って来たが、久々の再会の場で響子の体調を案じ、朱美に怒鳴られることになった。以下はそれに続く場面である。

「……ところで、野々花」

わたしは少し思い切って、呼びかけた。野々花がわたしを見る。

「わかってる。響子さんのことでしょ」

「えっ、どうして」

そう、そのとおりなのだ。お母さんのことで野々花に相談したいことがあった。

「さっきのばーちゃんとかーちゃんのやりとりを聞いてたら、わかるでしょ」

「……そうか」

優菜さんはひさしぶりに会ったお母さんに、顔色いいですねと言い、体調はどうかとたずねた。そのときお母さんはひどく慌てた様子だった。すぐさま朱美さんが、優菜さんのことを①鳥頭と怒鳴った。きつとお母さんの体調のことは、大人たちだけの秘密だったに違いない。それを優菜さんが、つい口にしてしまったのだろう。

あの会話で野々花にまで伝わったんだから、これはもう確信的で決定的なことだと思う。胃のあたりがずどーん、と重くなる。

「うちのお母さん。たぶん、どこか身体の具合が悪いってことだよね。」

*片頭痛とか*更年期じゃなくて」

「そう思いたくはないけど、そんな気がする」

言いづらそうに野々花が返す。

「わたし、さっきの優菜さんと朱美さんの会話を聞くまで、お母さんの具合が悪いなんて思ってもみなかった。っていうか、気がつかなかった」

「うん、ぼくも、ぜんぜんわからなかった」

お母さんが、なにかの病気だったらどうしよう。聞きたいけど、聞きたくない。だって、深刻な病気だったらどうするの？ わたしにできることなんて、たぶんなにもない。

「聞きづらかったら、ぼくが聞こうか？」

野々花が言う。少し考えてから、わたしは首を振った。野々花に聞いてもらっても、どうせ知ることになるんだったら自分で聞いたほうがいいに決まってる。

「どうもありがとう、野々花。大丈夫。自分で聞くよ」

お母さんは明日から正月休みに入る。明日聞こうと、意を決した。

(中略)

その日の夜、わたしはお母さんの部屋をたずねた。たいてい、お母さん、朱美さん、おばあちゃんは、寝るまで台所でお茶を飲んだり、居間でテレビを見たりして過ごしている。様子をうかがいつつ、お母さんが部屋に引っ込むのを確認した。おばあちゃんがお風呂に行ったので、聞かれる心配がなくて好都合だ。

「お母さん、ちょっといい？」

部屋の戸を開けると、お母さんは布団を敷いているところだった。

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

「なあに？」

②こういうときは、もしもじしていないでサッサと聞いたほうがいい。「ねえ、お母さんって、どこか具合悪いの？」

言った。聞いてしまった。

「なに、急に」

「昨日優菜さんが、お母さんに体調のことを聞いてたでしょ」

ああ、とそのときのことを思い出したのか、お母さんがうなずく。

「お母さん、こっちに來てから寝込むことが増えたよね。しょっちゅう病院にも行ってるし。会社だって休むことが多いじゃん」

「そんなこと……」

「あるでしょ」

かぶせると、お母さんは*眉根を寄せて黙った。

わたしはお母さんの顔をまじまじと見つめた。こんなふうにゆつくりとお母さんの顔を見ることは最近あまりなかった。

ベタベタと甘えていたのは小学三年生ごろまでで、それからは手をつないだりハグするようなことはなかった。学校であったことを、なんでもかんでも話していたのも小学生までで、中学にあがってからは、ぐんと会話は減った。

でもそれは当たり前の成長過程であって、決して仲が悪くなったわけじゃない。わたしたちはいつでも仲良しだ。お母さんとおばあちゃんとわたし。ずっと三人でやってきたんだから。

「ちゃんと話してよ」

お母さん、こうしてみると、身体が薄くなったように思える。ダイエットしたいって口ぐせみたいに言ってたし、最近は顔つきも丸くなった気がしていたから気づかなかった。

「あっ……」

もしかして、顔が丸く見えるのは、むくんでいるから？ 心臓がどくどくと波打つ。

「なに、なんの病気？ ちゃんと言って」

「あはは、なんでもないわよう」

「うそつかないでっ！」

「元気元気」

お母さんがガッツポーズを作る。

「お母さんっ！」

言葉を続けようと思ったら、息が吸えないみたいになって、ひいひい、と呼吸困難になった猿のような音が出た。

まさか、うそでしょ。自分で自分に驚く。わたしはひどく泣いているのだった。しゃくり上げながら、次々と涙があふれ出る。お母さんに聞きたいことがたくさんあるのに、声が出ない。

お母さんが病気だったらどうしよう。どうしたらいいの。わたしは小さい子どもみたいに、手放して泣きじゃくった。

③今になって、わたしはずっと不安だったんだと思い至った。お母さんは片頭痛持ちだし、ここ数年は更年期でつらいと言っていたから、体調が悪いのはそのせいだと思っていた。というか、片頭痛と更年期のせいにして見てみないふりをしていた。頭のどこかは気づいていたのかもしれないのに、知るのが怖くてお母さんの体調不良のことを遠ざけていたのだ。

「ごめんね、美琴。苦しい思いさせちゃったね。ごめんね」

お母さんも涙声だった。

「美琴に心配かけたくなって」

「……ちゃんと話してほしい」

少しかすれたけれど、わたしの喉からはしっかりと声が出た。お母

さんは大きく息を吸ってから、ゆっくりと吐き出して、わたしの顔を見た。

「わかった。ちゃんと話すね」

うん、と大きくうなづく。

「ゴールデンウィーク前くらいから、なんとなく具合が悪くてね。しばらく様子を見ていたけど、痛みが続くから病院に行ったの。いろいろ検査を受けて、先生から病名を告げられた」

そう言ってお母さんは、日本人の死因ナンバーワンの病名を口にした。「えっ」

と、実際声になったかどうかかわからない。そのあとの言葉が見つからない。

もしかしたら、その病名の可能性もゼロではないと思っていただけど、それは最悪のケースを想定してであって、言うなれば、自分がショックを受けないための*保険として考えていただけた。まさか、本当に……。

「今すぐどうこうっていうわけじゃないんだけどね。でも、世の中には万が一ってこともあるでしょ。だから、朱美ちゃんたちと一緒に住むことにしたの」

「……は？」

④病氣のことでまた目の奥が熱くなりそうだったけど、スッと冷めた。「わたしにもしものことがあったら、美琴はおばあちゃんと二人きりになってしまふ。おばあちゃんだってもう年で、いつながあるかわからない」

「そんなこ……」

「朱美ちゃんは朱美ちゃん、優菜ちゃんのことを気がかりだったの。こないだみたいに、ふらっと出ていっちゃうことがこれまでも何度かあって、残される野々花ちゃんが心配だって。自分が元氣なときはいいけど、頼れる親戚もないし、もしものことがあったらどうしようって」

「だから、ここに引っ越して一緒に住むことになったの？」

「うん、朱美ちゃんと何度も話し合って決めたの。大人が四人いれば安心だと思った。四人いれば一人や二人抜けても、美琴と野々花ちゃんを守るって思ったのよ」

「……おばあちゃんも知ってるの？」

お母さんがうなづく。

「優菜さんも？」

「うん」

「わたしと野々花だけが知らなかったの？」

⑤子どもは知らないほうがいいと思ったの。あまりにもつらいことだから」

意味不明だ。思考が追いつかない。

「だから、⑥うちと朱美ちゃんちは、運命共同体ってわけなの」

お母さんはそう言って、ちよつと笑った。

「……なに笑ってんのよ」

ありえない、ありえない、ありえない！

「勝手！ ひどいよ！」

今度はムカついて涙が出そうだった。大人たちだけで勝手に決めて！ わたしの気持ちなんてぜんぜん考えてない！

パンツ！

わたしはお母さんの部屋を出て、力任せに戸を閉めた。自分の部屋に入ってベッドに飛び込む。

勝手！ 勝手勝手勝手！ どうしてそんな大事なことを、わたしに

内緒で決めるのよ！ お母さんがいなくなるかもしれない、ってどういうこと？ おばあちゃんのことだって、いくら年だからってひどい。しかも、なにかあったときのために朱美さんたちと一緒に住むことにしただなんて！ お母さんとおばあちゃんがいなくなったら、朱美さんたちに面倒を見てもらうってこと？ なにそれ！ わたしは【⑦】じゃない！

悔しくて悔しくて、枕をバンバン叩いた。この瞬間、お母さんの病氣の【⑧】よりも、のけ者にされた【⑨】のほうが勝っていた。ムカつきすぎて、目尻がぬれる。

「……美琴、大丈夫？」

しばらくしてから、ふすま越しに声がした。

「入るよ」

わたしは野々花に話しかかった。わたしの気持ちをわかってくれるのは、野々花しかいない。

「なんかあった？」

わたしは野々花の目を見てうなづいた。

「響子さんに聞いたの？」

「うん」

わたしはさっき聞いた話を⑩洗いざらい野々花に伝えた。野々花は真剣な顔で話を聞いてくれた。

「大人だけで勝手に決めて許せないと思った」

野々花は唇をとがらせて、ふむう、と鼻から息を出し、

「……響子さんの体調は大丈夫なの？」

と、聞いた。

「うん、今すぐどうこうっていうわけじゃないとは言ってたけど」

「そうか……。でも心配だね」

野々花の言葉でさっきまでの【⑨】は影をひそめ、今度は大きな不安がやってきた。お母さんの病氣のことを思うと、心がしんとして、身体中が不安でいっぱいになって、いてもたってもいられなくなる。

「どうしよう、お母さんになにかあったらどうしよう」

気持ちがあっちに行ったりこっちに来たりで追いつけない。

「明日、もう一度ちゃんと聞いてみよう。全員参加で。ぼくがみんなに伝えるから」

野々花が言う。

「今日はもう寝よう」

わたしはうなづいた。なんだかとても疲れた。

「ねえ、野々花。ふすま開けたまま寝てもいい？」

「それより、ぼくの布団を美琴の部屋に運んだほうがいいね」

そう言って野々花がすぐに布団を持ってきて、わたしのベッドの隣に敷いた。電気を消して布団にもぐる。すぐ隣で野々花が寝ている。それだけで、ものすごく安心できた。

「あのさ、大人たちが勝手にいろんなことを決めたのは、確かに私もしろくないけど、でもさ、ぼくはこうして美琴の隣で寝ることができてよかったと思うよ」

野々花が言い、わたしは今の言葉をゆつくりとかみしめた。そのとおりかもしれない。前のマンションでお母さんの病氣の話を聞いていたら、もつと大きな不安に押しつぶされていたと思うのだ。誰にも話せずに一人悩んで、でも悩んでもどうにもできなくて、恐怖と闘うしかなかっただろう。

野々花がいてよかったと心から思う。ムカついたけど、⑪お母さんと朱美さんの作戦は、あながち間違えていなかったかもしれない。

「おやすみ」
「おやすみ」

目を閉じると、まぶたが引きつれた感覚があった。たくさん泣いたからだな。明日、目のはれるな。いつもは奥二重だけど、明日は完全な一重になりそうだな。そんなことを思いながら、すうっと眠りにおちていった。

(椰月美智子『みかんファミリー』による)

注 *片頭痛——頭の片側だけが強く痛むこと。

*更年期——更年期障害のこと。年を重ねていく中で体や心の様々な場所に不調が表れる。

*眉根を寄せる——顔をしかめること。

*保険——悪いことが起こったときのための備えのこと。

問1 ——①「鳥頭」とは「物忘れのはげしいこと」のたとえであるが、ここでは優菜のどのようなことを表しているか。最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア、優菜がわざわざ美琴や野々花を不安にさせるような質問をして、秘密にするはずだった約束事をなかったことにしてしまったこと。

イ、突然いなくなって家族に迷惑をかけていたにもかかわらず、優菜が自分のしたことを棚に上げ、図々しく人の心配をしていること。

ウ、優菜が家を空けている間に、響子の病氣のことについて忘れ、子どもたちがいる前でみんなの気持ちを逆なでするような発言をしてしまったこと。

エ、子どもたちの前で響子の体調について話をしないという大人だけの取り決めがあったにもかかわらず、優菜がうっかりたずねてしまったこと。

オ、優菜が家を空けている間、すっかり家族への思いやりの気持ちを忘れてしまい、思ったことをすぐ口にするような自分勝手な行動をするようになったこと。

問2 ——②「こういうとき」とはどのようなときか。「とき」に続くように十五字以内で答えなさい。

問3 ——③「今になって、わたしはずっと不安だったんだと思いつた」とあるが、わたしの心情について六十字以内で説明しなさい。

問4 ——④「病氣のことでもまた目の奥が熱くなりそうだったけど、スツと冷めた」とあるが、この時の美琴の心情を説明した次の文の空らん【A】【B】を本文中から指定の字数でぬき出し、空らん【C】は最適なものを選び、記号で答えなさい。

母の病氣のことを聞き【A・四字】を受けていたのが、朱美たちと【B・十一字】経緯を知らされ、【C】。

【C】

ア、気持ちの高ぶりが静まった
イ、驚きで何も言えなくなった
ウ、冷静さを取り戻した
エ、母にあきれ果てた
オ、怒りにふるえた

問5 ——⑤「子どもは知らないほうがいいと思ったの。あまりにもつらいことだから」とあるが、ここでの響子の考えとして最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア、共同生活をする本当の理由が、子どもたちへのかくしごとをごまかすためだと美琴や野々花に知らせるのは、不誠実であると考えた。

イ、共同生活をする本当の理由が、家庭環境が安定せずいつ何が起こるかわからない現実にあると美琴や野々花に知らせるのは、ふびんであると考えた。

ウ、共同生活をする本当の理由が、親が子どもを育てる自信がないからだだと美琴や野々花に知らせるのは、理解できないだろうと考えた。

エ、共同生活をする本当の理由が、大人の手を多くして子育ての間をかけないようにするためだと美琴や野々花に知らせるのは、失礼であると考えた。

オ、共同生活をする本当の理由が、親が子どもを育てられない境遇にあると美琴や野々花に知らせるのは、耐えられないだろうと考えた。

問6 ——⑥「うちと朱美ちゃんちは、運命共同体ってわけなの」とあるが、どのような点で「運命共同体」なのか。三十字以内で説明しなさい。

問7 空らん【⑦】に入る語として最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア、道具 イ、見世物 ウ、大人 エ、野々花 オ、モノ空らん【⑧】【⑨】に入る感情を表す語の組み合わせとして最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア、⑧驚き ⑨孤独
イ、⑧動揺 ⑨絶望
ウ、⑧つらさ ⑨苦しみ
エ、⑧悲しみ ⑨怒り
オ、⑧心配 ⑨怖さ

問9 ——⑩「洗いざらい」の本文中における意味として最適なものを選び、記号で答えなさい。

ア、一言一句まちがえずに
イ、可能な限り誠意を持って
ウ、残したり隠したりせず全て
エ、同情を引くような言い回しで
オ、自分の感情を交えないように

問10 ——⑪「お母さんと朱美さんの作戦は、あながち間違えていなかったかもしれない」と美琴が考えているのはなぜか。三十字以内で説明しなさい。

問11 ——「大人たちが勝手にいろんなことを決めたのは、確かにおもしろくないけど、でもさ、ぼくはこうして美琴の隣で寝ることができてよかったと思うよ」とあるが、他者が「勝手に決めた」ことで、最初は反感を覚えつつも、最終的に納得できることの具体例を考え、九十字以内で説明しなさい。

